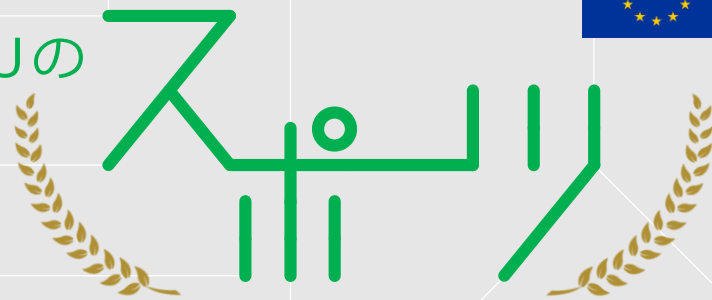




魅せる・競う・繋がる EUの

WATERPOLO 水球



EUの水球は、いま

イギリス発祥とされる水球だが、欧州の中ではながらくハンガリーが「水球王国」の座を欲しいままにしてきた。1928年から2008年までの80年（21回）のオリンピック記録をみると、ハンガリーは実に16個のメダルを獲得している（金9個、銀3個、銅4個）。そのほか、旧ユーゴスラヴィア諸国、イタリア、ギリシャなども強豪であり、とりわけ近年はEUの最新加盟国であるクロアチアの活躍がめざましい。地中海沿岸諸国（とハンガリー、と単純に書くことができない訳は紹介図書に語ってもらうこととする）で、水球がメジャースポーツの一つであることは間違いない。

私の研究フィールドであるスペインも水球が盛んな国のひとつであり、2000年にやっとオリンピック競技となった女子水球でも、スペイン代表はロンドンオリンピックで銀メダルを獲得している。写真は昨年調査がてらバルセロナ近郊で観戦したクラブチーム水球の試合であるが、地元の老若男女が応援に詰めかけ、観客席は満員であった。ピリオド間の休憩時間にはシンクロナイズドスイミングの選手が演技していた点も興味深かった。

なお来年7月には、水球の欧州チャンピオンズリーグ大会がバルセロナで開催される。（岩崎恭子が「今まで生きてきた中で、一番幸せです」の名言を残した）1992年バルセロナ五輪の水泳競技会場であるオリンピックプールで、熱戦が繰り広げられる。



スペイン・サバデイでの試合の様子
(2016年3月・筆者撮影)

水球について

水球は、7名で構成された2つのチームが、プールに作られたコート内で、ゴールにボールを入れあい点数を競う競技。「水中のハンドボール」とも言われるほか、水中では掴む、蹴るといった反則行為が多発する事から「水中の格闘技」とも言われている。競技のルールから実践までについては、大本洋嗣『水球マニュアルー基礎から実戦まで』に詳しい。



「バルセロナ・アトレティック水泳クラブ」とプールの目前に広がる海岸（2016年3月・筆者撮影）

私にとっての水球

中学の時、「水泳部」に入ったら水球部であった。聞くところによると、もう30年以上も前に競泳から「転向」したようだ。私自身はへっぽこキーパーとしてチームの足を引っ張り続けたただけであったが、水球にハマってスペインに留学した先輩に会ったり、学校に日本代表選手が訪れたりする中で、競技としての面白さと厳しさにもかかわらず「マイナー」なスポーツの魅力に気づくことができた。ところが、学部時代にイタリアに留学し、その後スペインを研究のフィールドとする中で、水球の「メジャー」さに驚くこととなり、今日に至る。

本の紹介

水球に関する日本語の学術書はいまだ存在しないようだ。しかし、水球が盛んな国々に関する研究入門書を開くことで、水球が「国技」とされてしまうほど「メジャー」な競技となっている社会があることを知ることができる。そして、逆に水球を通して、その社会を考えることができる（かもしれない）。

①百瀬亮司・亀田真澄・山崎信一・鈴木健太『アイラブユーゴ2』

自主管理社会「趣味」という強烈な理念に基づき、ユーゴ愛あふれる研究者たちが綴った、実はとっても真面目な本。スポーツは、ユーゴスラヴィア連邦をなす諸民族の共生という理想を体現する重要なシンボルであったが、とりわけ水球はサッカーやバスケットをも凌ぐ国際的な名声を博していたことが記されている。

📍本館2階【2390:53】

②羽場久美子（編）『ハンガリーを知るための47章』

水球について多くが語られているわけではないが、ハンガリー抜きに水球を語ることはできない、ということでご紹介。

📍本館2階【2340:227】



自己紹介

- ・ 上野貴彦
- ・ 社会学研究科博士課程1年 (国際社会学)
- ・ 研究テーマは南欧の都市・地域と移民バルセロナ「反うわさ戦略」

